# ２１世紀における持続的発展への移行に向けて

**研究管理官（森林・林業担当）　桜井尚武**

サスティナビリティ（持続可能性）という言葉がすっかり定着しています。1992年の国連環境会議で提案されたサスティナブル・ディベロップメント（持続的発展）の下に，森林科学の世界では，サスティナブル・フォレスト・マネージメント（持続的森林管理/経営）が受け入れられ，この概念を実現するため，行政，研究両分野で手法開発のための模索が続いています。

サスティナビリティという概念は，1980年代に国連世界環境開発委員会の場で，元ノルウェー首相のブルントラント博士が提唱したものです。1980年代の日本は，バブル景気に沸いていた頃で，いかに儲けるか，そのためには消費は美徳，という考え方が支配していました。この際限ない欲望を満たそうとする発展の下で，大気汚染や新たに作り出された化学物質の健康への悪影響，温室効果ガスの増大による気候変動などが，地球規模で拡がり出しました。その結果，科学は人間生活を豊かにし人々を幸せにするという常識が，実は神話ではないか，という危惧を抱く人々が増えてきて，一方的な科学の発展は本当に善なのか，という疑問が発せられたのです。

錬金術師や神官が独占していた技術の手法を開放し，公理や法則を知識の世界に公開してこの手法を適用すればいろんなことができるという科学を作り出したことが，産業革命を皮切りとする現在の繁栄をもたらした科学の時代を誕生させました。しかし，その科学は幸せと同時に多くの不幸も伴っていたのです。

今年5月中旬に東京でインター・アカデミー・パネル（IAP）に加盟する世界80余国の科学アカデミーの代表が集まって「世界科学アカデミー会議」が行われました。この会議のテーマは「21世紀における持続可能性/持続的発展への移行」で，「人口と健康」　「食料」　「水」　「エネルギー」　「消費」　「知識と教育」に関する学術的な議論が交わされました。強調されたのが「エコノミーからエコロジーへ」　「情報の公開と普及」です。1980年代まではエコノミーの時代だったが，90年からはエコロジーの時代に向かっている，科学のもたらす問題点をみんなが理解していれば暴走は防げる，ということが，科学がもたらした地球規模の環境汚染，科学が解決し得なかった途上国の貧困と飢餓を背景に議論されました。

「もともと科学は社会の束縛を受けずに真理の探求をするものという了解があったが，それがそれだけではいけなかった。この会議では人口が80億人と予想される2050年に向かって，持続的発展への移行をするために科学者が何をなすべきかを議論する」とこの会議のホストの吉川学術会議会長はいっています。社会や人間生活を視野におかない科学発展はいけない，ということを宣言したものです。この会議のキーワードには，続く2世代のためにとか，先祖から貰った地球ではなく子孫から預かっている地球とかというものがありました。

森林科学に携わっている研究者には取り立てて新しい概念ではありません。しかし，世の科学の大筋がようやく私たちの目指している方向に向かい始めた今が，持続的な発展へ，エコロジーへ，人間生存へ向けて，我々の研究方向や研究姿勢が適切であるかどうか，真剣に見直すいい機会です。